

功利主義か、義務論か

厚生労働委員会 専門員

こばやし ひとし
小林 仁

ドラマ「下町ロケット」には、池井戸潤の原作「下町ロケット2 ガウディ計画」にはないシーンがある。その1つが最終回、小泉孝太郎が演じるサヤマ製作所の椎名直之と阿部寛が演じる佃製作所の佃航平が、深夜、2人だけで対峙する場面である（脚本八津弘幸）。

人工心臓コアハートの臨床試験で患者が死亡し、データ偽装で追い込まれつつあった椎名直之と、小児用人工弁の開発を目指す「ガウディ計画」に活路を見出そうとする佃航平。

椎名は、60%という数字を高いと思うか、100%には遠く及ばない低い数字だと思うかと問いかける。安全に作動する確率が60%の医療機器、10人中6人は助かるが4人は助からない。椎名は佃に詰問する。その医療機器を使うべきでないと言い切れるか。それを使えなかったせいで助かるはずの6人が死ぬとしても、その選択は正しいと言い切れるかと。

佃は反駁する。亡くなった人にとって、たとえ1%であろうと99%であろうと関係ない。1%だから死んでも構わないなんて思う人間はどこにもいない。大勢を救うために少数の者を犠牲にすることが正しいのか。ずっと昔から悩みに悩み続けてきた先人たちは、自分たちの無力さと闘いながら、全員を救いたいと努力して、どうしても救えなかった人たちの尊い犠牲の上に、唇を噛み締めながら、今日の医療と技術を作り上げてきたのだと。

2人の主張は激しく対立するが、これは、椎名が功利主義の、佃が義務論の立場に立っていることから生じる倫理観、価値観の相違である。ベンサムに始まる功利主義は、社会全体の効用の総和を最大化させること（「最大多数の最大幸福」『道徳及び立法の諸原理序説』）を重視する。これに対して、カントの義務論は、誰もが従う義務のある道徳法則に従い行動せよ（「同時に誰にとっても普遍的な立法の原理」『実践理性批判』）と説く。

この問題をどう考えるか。フィリップ・フットらが考案した思考実験が手がかりになる。

暴走する列車の先に、何らかの事情で5人が線路に縛り付けられている。彼らの手前には分岐線があって、その先には1人の人間が縛り付けられている。ハンドルを握る運転手はどうすべきか。あるいは線路の脇で分岐レバーに手が届く目撃者であればどうすべきか。

思考実験をもう1つ。病院に臓器移植でしか助からない重篤な患者が5人いる。それぞれ心臓、肺、肝臓、腎臓、大腸に疾患がある。ある時、健康診断に訪れた人がいて、幸い何の異常もなかった。その人から臓器を摘出し、患者に移植すれば5人を助けることができるが、移植しなければ5人は亡くなる。つまり1人を犠牲にすれば5人が助かる。こういう行為は許されるだろうか。許されないとしたら、分岐線のジレンマと何が違うのか。

国会での論戦を聞いていると、その背後にあるものが実は功利主義と義務論の相克であることが少なくない。厚生労働委員会では感染症対策や予防接種の在り方を巡る議論などがその一例である。広く見渡せば、原発や安保法制などを巡る議論もそうかもしれない。

議会政治では、相手の依拠する立場を知り、そのロジックを冷静に分析してこそ、実りある議論となる。政策を磨く鍛錬のために、調査室を活用していただければ幸いである。